

# NPO 法人 ベーシックライフインフォメーション協会 会報第18号

## オール台湾デー台風一過後、華やかに開く

令和元年オール台湾デーは未明に台風第十九号が関東地方を通過、被害が心配されたが都内は交通機関がおおむね正常に動き早期の開催決定が幸いし、予定通りオープンできた。お出でになった参加者は申し込み票等の記入者約百五十人が確認され市の立ち寄り者を含めると三百人余の来場者が推定出来て、盛況のうちに終わった。

## 講話 私の生まれ島 台湾

川平 朝清

私は台湾台中市で生まれ、十九歳になるまで台北で育ちました。台湾は私の生涯にとって三つの原点となったところです。

### 1 沖縄人としてのアイデンティティーの原点となったところ

あの当時私たち一家はカワヒラと名乗っていました。カビラといういちいち説明が必要だったからです。また沖縄の人びとに偏見を持ち、中には差別する人もおりました。小学校でカワヒラ、お前は、琉球人か？と言うんですね、うん、そうだよと答えると、君は琉球人に見えないよな！それが、私への同級生達の誉め言葉のようなものでした。

私の家には台湾人の女中さんがおりました。私は朝清という名前なので、家族の間ではキヨシと呼ばれていました。

キヨシ、この梅ちゃんはお前の女中さんじゃないんだよ、だから、布団の上げ下げなどそう言ったものはきちんと、自分でやりなさい、そう言うしつけをされました。差別的言辭はいっさい許されませんでした。

この梅ちゃんは私のことを坊ちゃんと呼ぶんです。まあ坊ちゃんと呼ばれて悪い気はしないのですがあの頃坊ちゃんと言えば夏目漱石の坊ちゃんのことでした。一番良かったのは、学校時代に、海浜学養の際に持って行った、私のパンツとかシャツに、坊っちゃん縫い付けられていて、おい、ここに坊っちゃんがいるぞと級友に冷やかされたものです。

私の両親は台湾の人たちに対する態度は大変穏



台北駐日経済文化代表處  
謝長廷氏から贈られた祝花



ALL 台湾 DAY チラシ

- 11時 15時 映画「空を拓くー建築家・郭茂林という男」上映
- 12時40分 講話「私の生まれ島 台湾」話し手 川平 朝清
- 13時30分 コンサート
- 第1部 二胡とピアノの伴奏による日本と台湾の歌
  - 台湾の歌
    - 濱千鳥 浜辺の歌 里の秋 荒城の月など
    - 嚙通嫌台湾 西北雨 望春風 雨夜花など
  - 出演 張瑞銘 入江玲子
- 第2部 端唄
  - 出演 相撲甚句 梅は咲いたか 玉川 祇園小唄など
  - 出演 松永流 松永花悠 松永花有
  - 展示 東京友禅 森川明洋 森川雄大の作品展示など
  - 11時 物産販売市
  - 10時30分 福島県玉川村物産品 タピオカ、台湾おこわ、台湾ビール、グアバジュース
  - 17時 終了



やかで優しくかったことは、私にとつて良い教育でありしついでであったと思います。

私は溥生ながら琉球人とか、沖縄人とか言つ事について、かねてからいわれている中で、沖縄は、独特の王国を持っていたのだと思つ。つまり琉球王朝というものがあつて明や清国の冊封、これを沖縄では、さつぽつといふのですけれども王冠を持って来て初めて王として認められる制度がありました。ですから色濃く、中国大陸の文化、文明、学問とかの影響を受けていました。

ですから、私の祖父の時代までは琉球王朝に仕えたものは、中国名と、ヤマト名(日本式の名前)と琉球の名前が有りました。私の一族は尚王朝の血を引くものとして、向(沖縄ではシヨウと発音)という中国名がついておりました。最後の琉球王尚泰子侯に仕えた私の祖父は向大輝川平親雲上朝彬(シヨウタイキカヒラペーチンチヨウヒン)と名乗っておりました。

ご承知のように、沖縄王朝といふものは、15世紀に誕生するのですが、初めの180年というのは中国・東南アジアとの貿易で

### 川平 朝清 (かひら ちようせい)



1927年日本統治下の台湾台中市に生まれ、小学より台湾放送協会放送劇に出演、会中より台湾放送協会放送劇に出演、

戦後は沖縄に引き揚げ、アメリカの占領下に設立された「琉球の声」放送局のアナウンサーをはじめ、アメリカ留学後琉球放送(RBC)、沖縄放送協会(OHK)、NHKの経営に携わる。昭和女子大学名誉理事・名誉教授。

栄えた王朝です。ところが1600年代に入りまして薩摩の侵攻を受けまして、薩摩と中国の両属体制になります。薩摩が琉球を利用したのは、鎖国のまま、いわゆる徳川幕府のまま貿易を琉球にさせる事で富を得た。それから大島に砂糖を栽培させてその砂糖を基にして大変な財を築き、明治維新の原動力となっております。

私の父や母は、琉球王朝には誇るべき歴史や文化と芸能というものが発展していったという事を教えてくれました。そのことが郷土愛となったのかもしれない。その時私が思った事は、台湾人も差別され、琉球人というのも差別されて、同じ差別されたという悲哀を向こうで体験したことが、その後沖縄人としてのアイデンティティーといいますが、誇りというものを持つ大きな助けとなりました。

先程郭さんが言われていたように、台湾で、教育を受けて、東京に出ていろいろな才能を発揮してそれが現に日本の建築界にも貢献して自分の郷里の台湾にも貢献された。そういう二つの文化にわたって育ったということも共にあるし、それから小学校それから後に来る私の台北高校時代の台湾人の旧友達との交流を今尚続けられていることを大変有り難く思っています。

### 2 旧七年制台北高等学校は私の人格形成の原点となったところ

私の人格を形成する上で台湾における旧7年制台北高等学校とでの教育は、非常に大きな影響を与えてくれました。

台北高等学校というのは、1922年大正9年に創立されたのですが、日本にある

第一高校からいろいろな高等学校ができました。日本が台湾を領有して27年目のことでした。台北高等学校は、非常に開明的な校長、それから内地から来た教授たちが掲げた『自由と自主』という目標と指針がありました。ですから7年制の高等学校というのは今の中学校と高等学校プラス短期大学のようなものにあたる訳ですが、この学校は、上級生と下級生の間でみんな君付けで呼ぶんですね。下級生も上級生を佐藤君、加藤君、上級生も下級生に対してカワヒロ君、鈴木君という呼び方をしているような雰囲気ですから、上級生の行う鉄拳制裁のようなものは一切ありませんでした。

7年制というのは今でいう中高一貫教育に当たるんですけども、中学部門を尋常科といっていました。尋常科は、一学年40人、四学年ですから全校生徒160人というところですよ。尋常科に入りますと帝国大学への道がそのまま与えられるという非常に競争率の激しいところでした。

そういう学校で教えてくださった先生は、いわゆる教授クラスの人達が教えてくださるので、非常に質の高い教育をしてくださっていました。例えば尋常科4年を終了するときは、修了論文と言つものを出さなければなりません。これはそれぞれにテーマを選ぶのですが私は「沖縄の民謡」というのを選んで書きましたが、4000字詰の原稿用紙で130枚になりました。そういう事を励まし薦めてくれる先生がいたのです。この論文を書き上げた時は尋常科4年を修了する時ですから今なら高校一年生16歳の時でした。この尋常科時代に太

平洋戦争が勃発しました。皆様もご承知のようにあの当時英語というものは、敵性語とよばれてしてました。当時学校には、配属将校が居りました。それは陸軍の後藤大佐でした。その後藤大佐が英語科の主任中野賢作先生に、敵性語を教えるのはいかがなものかと言つたんですね。すると中野先生、この先生はオックスフォード大学に留学した経験のある先生でこの先生が後藤大佐に、あなたたちはこれから何処を占領するつもりなんだ、と言いました。これから南方進出だ！そこに行ったら何語を使って行政を行うつもりなんだ？私は卒業生が南方に行つてそういう仕事につけるように、生徒を教育します。と云つたので、後藤大佐は返事ができませんでした。おかげで、台北高等学校では、戦争中でも週8時間もの英語の授業がありました。ですからね、私は戦後になって英語を使うような立場になった時に、これは非常に役に立ちました。

尚ですね、台北高等学校の高等科になると、これは理科と文科に分かれているのですが、私は、医学系統の理科のクラスに入りました。入ると同時にどういふ事が起こったかという、昭和20年ということですから、学校全体が学徒動員で軍隊に召集されました。私は軍隊での経験が、とてもいい経験だったと思ひました。なぜかといひますと、鬼畜米英を打ち負かすというのが、当時のスローガンの一つでしたが鬼畜は身内にいたのです。日本陸軍だったんです。本当に上官の下の兵士に対する扱いは非常に、残酷かつ残酷でしてね、殴る蹴るは当



たり前でしてね。それは何を元にしていらるかというところ、軍人勅諭で、明治天皇が下された軍人に対する規則、教えというものがありません。その中にある、上官の命令は天皇の命令と心得よ、という一文があるのですけれど、上官が我々の命令は天皇の命令である。という無理無体を、押し付けてくるんですね。ですから、殴る蹴るは当たり前前でした。

幸い学徒出陣で上官も大学を出ている上官でしたので、私のところでは下士官が兵隊に残虐行為をするような事は、幸にして無かったのです。ところが、軍人勅諭の、上官の命令は、朕の命令と心得よ。という下に書かれている文章は、公務を離れた場合には部下を慈愛を持って扱えという、明治天皇の教え、指示というものがきちんとあるんですね。しかし下士官や上官たちは、そんな事は全然無視している状態だったのです。これは私の人生の中でも非常に重要な見聞になったと思います。自分の兵士に対して残虐な日本の兵士たちが戦場にで何をしたらかは、皆さんにも想像がつくかと思えます。

もう一つですね、台湾高等学校で得た大事なものは成績証明書です。私は1945年、昭和20年に、終戦を迎え、無事復員して復学して台湾高等学校の理科をついに卒業することが出来ました。戦後になりました。アメリカ留学をする時に、私はクリスマスチャンでしてね、私の教会のアメリカの宣教師ゴッドフリー先生が、君はどういう教育を受けてきたのかと聞かれるので、台湾高等学校で医学系の勉強をして来ましたと

伝えたところ、その成績証明書はあるか？と言ったので、もちろんありますと答えました。この成績証明書をアメリカに持って行きなさいと言ったんですね。日本語で書かれたこんな物がアメリカで役に立つものかと半信半疑で持っていましたらですね、台湾高等学校で得た単位は、幸い東大に留学経験のある教授がおられて認められました。私が、アメリカに行った時は、放送、ドラマの専攻で行ったもので、その時に成績証明書を見るとみんな理系ですよ、物理も化学も生物も、ラジオテレビは文系ですよ、でもアメリカの大学は違うんですね、文系の学生こそもっと理系の単位をとることが望ましい、君はいい勉強をして来たので、台湾高等学校の成績証明書のおかげで一年分の単位がもらえました。ですから台湾高等学校は国際的に認められていたと言った事がわかりました。

**台北放送局は私のキャリアの原点となったところ**

第3の原点はというものは、私にとりまして台湾での経験の中でこういうのが役立つとは思わなかったのですが、放送出演の経験です。私の兄が昭和6年に創設された台北放送局のラジオ新聞の編集長をしていました。初期の番組を見てみますとほとんど内地日本放送協会の中継を短波で受けたものを、再放送する形で番組が組まれていました。私の兄は台湾なりに子供の時間だけでも、ここで作るよと提案しました。どういふことから始めたかというところ、お話しただけで子供に本を読み聞かせる時間を作ったり、小学校や公学校いわゆる台湾の

児童達に子供ニュースを読ませたり、児童劇などを放送しました。さらに私の兄三人は銀の光子供楽園というのを作り子供達を集めて舞踊や児童劇を公演しました。私は小学校に入る前から、放送児童劇に出演するという機会がありました。当時台北は、児童芸術が盛んでした。児童劇も盛んになるから、舞台劇、舞踊、邦楽なども盛んで、台北の児童芸術団体は八つもありました。私の手許には日高児童楽園、楽園島童、愛国児童会、若葉児童会、ねむのき子供俱樂部、なでしこ児童楽園、南の星子供サークル、こう言った多くのサークルが盛んに日本舞踊や児童劇などを上演、放送していました。

私は実は医者になるつもりだったのですが、私には沖繩でラジオ局を作ろうという時、私の兄が最初の局長になるんです。しかしアナウンサーがいらないですね。すると、清、おまえ台北で児童劇団なんかで、ラジオの経験があるじゃないか、アナウンサーをやってくれということになりました。標準語、それは台湾での標準語で、台湾にいる時、私達は、新公園に行きよったなあとか、あそこで台湾ソバ食べよったなあ、と言っ方をするんですが、聞いてみるとこれは九州のなまりなんです。私の長男の嫁が江戸っ子なんで、お父さんたべよったとか、行きよったとか何処の言葉ですかと聞くので、標準語だろと言っ方と、違います。本来はいきました、たべましたと言っ方ですと、直されました。それくらい湾生の標準語は怪しかったです。すけれどもいづれにせよアナウンサーにな

りました。アナウンサーになったおかげで、アメリカ軍の占領下にあった東京NHKのアナウンサー養成所に入ることが出来ました。沖繩から東京に留学する事になったのです。それもアメリカの軍用機で立川に行つて立川で軍用バスで、内幸町の放送会館に行つてそこで本場の標準語というものを学びました。1952年、昭和27年のことです。

この私の放送キャリアの原点は実は台湾にあつたわけです。その後アメリカに留学しましてそこでラジオテレビ、ドラマを専攻し大学院ではラジオテレビの経営学を学び、沖繩に帰つてからは琉球放送に入り、テレビジョンの設立の為に、いささかお役に立ちました。

私は沖繩放送協会からNHKに入つてNHKで国際関係の仕事をしました。沖繩から来て国際関係の仕事というのは、実は沖繩がアメリカの占領下にあつた事、アメリカ留学にしたこと、そして私の英語力の基礎を作つてくれた、台北高等学校での教育が大変役だった事は言うまでもありません。

台湾は私の生まれ島、私の三つの原点となつたところです。





## 第四回オール台湾デー に思う

増田 公代

強烈豪雨、スーパー台風十九号直撃の翌日、開催心配をよそに、予定通り台湾デーは開催されました。係の方々の熱意を基に。

私は第二回に続いて、また、「空を拓く」を見ました。今回も新鮮な気持ちでいろいろと学ぶことができました。特に、茂林さんの最後のメッセージが心に響き、印象に残りました。

「夢を持つのが男である。私の人生は真に夢を持ち続けた人生であった。その結果が、こうした実現に至ったのである」と。

茂林さんが後世に伝えたかった内容は、この言葉の中に凝縮され、すべてを物語っていると思います。常に「楽しい暮らしを快適に」の夢の実現を追



受付



コンサート



端唄の演奏



友禪の展示

い求め続けた郭茂林さん。

素晴らしい業績の成功の鍵は

- ①一人一人がまず、夢を持つことから始まる。
- ②次に、智の和合でアイデアと実用性を探求していく。
- ③すると、1+1が10となり、10+10が100となり……
- ④智の和合で、楽しい暮らしの空間を目指した結果、
- ⑤毎日楽しく快適に暮らせる偉大な建築の実現に繋がった。という内容でした。

プロジェクトチームのみなさんのイキイキ、ワクワク感。真剣勝負の眼の輝きや鋭さ等、ヒシヒシと伝わってきました。みなさんの自信と誇りに満ちた表情、暖かい人間関係の中で、慕い慕われ、互いに認め合い尊重し合いつつ智の和合で最高の仕事に繋いでいく過程は、厳しさの中に美しさをも感じ魅力的でした。

茂林さんの生き方には、建築界だけ

でなくこの世界、どの分野においても通じると思いました。人間として豊かに人間らしく生きる生き方のヒント、仕事のヒント、学びのヒントがいっぱい詰まった素晴らしい映画でした。多くの若者たちにもぜひ観ていただきたい内容だと思いました。

私もどんな小さな夢でも諦めず、努力を忘れず、豊かな人生を送りたいと思いました。

午後のコンサートは、超瑞銘・入江玲子ご夫妻による二胡の演奏とすばらしい歌声に浸ることができました。日本の歌五曲と台湾の歌謡七曲がすべて暗誦され、声高らかに美しく歌われた張瑞銘先生はすごいと思いました。

二胡の調べにうっとり、思いつけず異国の風情や情緒を味わうこともできました。最後には、奥様のリードで「雨夜花」の歌を日本語と台湾語で

指導くださいました。私たち観客も一緒に歌えました。感激でした。

私は「雨夜花」は以前から原語でも歌ってみたかったので、とても嬉しかったです。私も暗誦して歌えるようになります。そして友人たちにも教えてあげたいと思いました。川平朝清先生のミニトーク「キャリアの原点は台湾！」は風格、重みのあるお話でした。人間としての優しさ、挑戦の大切さ、文化、文明、学問の果たす重要さなどに響きました。すばらしい一日でありがとうございました。

### 台湾との交流

#### 母の台湾の出の教え子の来沖

上里 佑子（会員）

母は台湾の屏東で生まれ育った。屏東小学校、屏東女学校、台北師範学校で学んだ。その後、屏東の海豊国民学校で教師をしていた。本人は日本人の学校に行きたかったようだが、その校長先生が沖繩出身で母が女学校のころから採用しよう決めていた。

母は22年前に他界したが、母の教え子が来てくれる。8月11日に11人で来沖すると連絡があった。彼は2年前にも来てくれた。16日に帰るという。ちょうど旧盆で忙しい時期である。11日は歓迎会をした彼の息子さんやお孫さんを紹介してもらった。



母が台湾で教えていたところは小学生だったと思うが、現在は86歳になっていた。

15日は旧盆で開店している店は少なかった。旧盆は親戚の家へ行ってお線香をあげる習慣がある。タクシーに乗って駆け足で親戚訪問を済ませ送別会へ行った。母がいなくても、私たち姉妹を頼ってたびたび出かけてくることぐうれいことであった。

台湾は沖繩から1時間で行ける一番近い外国である。東京に行くには2時間かかるが、台湾が一番近い。連休には娘の家族がそろって出掛けた。動物園に行き、楽しかったと孫は話していた。

こちらには台湾からの引き揚げ者も多くいて、台湾会というのが例年行われている。台湾の民族舞踊を見学し、賑やかであった。

日清戦争が終わって、日本は台湾を植民地にした。その時に祖父は単身で渡台したようだった。その後、結婚の時期に沖繩までお嫁さんを貰いに来て、祖母を連れて再び台湾へ行った。祖父は長い間、台湾電力で働いていた。定年後に屏東ホテルを立ち上げ、そこで母たちが育った。長女、次女、三女は高雄女学校に通った。汽車通学のようにだった。四女から屏東女学校が出来て四女、五女、六女は屏東女学校に通った。六女の叔母に誘われて、2013年4月にチャイナエアラインで台北へ

行った。叔母の友人が屏東で同窓会を開いてくれてそれに参加するためだった。皆さん日本語を嬉しそうに話していた。生まれてから戦後までの15歳まで使ったという日本語は、彼らにとつて懐かしい母語だと強調した。

台湾は何度行っただろうか。牡丹社事件の墓参りでも行った。宮古の人たちが琉球へ奉納のために来てその帰りに台風で遭った。台湾へ流れ着いた船の殆どが牡丹社事件で殺されていた。

今沖繩には台湾、韓国、中国から観光客が押し寄せている。国際通りという繁華街に台湾人が大きなホテルを建設中である。これから台湾の観光客が来やすい沖繩になっていくのではと思われる。

## 台湾人戦没者慰霊祭 懇ろに挙行

11月3日、恒例の慰霊は会員及び都内在住の協力者十二人が参加しボランティアの僧侶の司祭で仏式によりしめやかに過ごされた。

この碑に

台湾出身の方々

あなた方がかつてわが国の戦争に

よって尊いお命をうしなわれたことを深く心に刻み永久に語り伝えます。

どうぞ 安らかに永眠してください。

とねんごろに刻まれている。

先の大戦で日本の兵士として戦死な



慰霊碑全景

された台湾の方は三万三千人余といわれている。訪れる人が少ない近年、秋の十一月三日に協会は慰霊を続けている。これで七回目となった。

今年が高齢者を考え乗用車を借りて参加者が運転することで実現にこぎつけた。慰霊の祭祀は浄土真宗 大泉誓願寺 住職 藤田宗勲 同寺僧侶 藤田明順で懇ろな読経、法話と続き、各人が焼香し礼拝して戦没者の冥福を祈った。

この慰霊碑周辺は奥多摩町の手で安心安全な周辺整備がなされていて、眼下に見る奥多摩湖の眺望も抜群で参加者は満足し感謝の念を抱いて下山した。

## 台湾人戦没者慰霊碑慰霊に参加して

郭 純(会員)

11月3日(日)協会主催の台湾人戦没者慰霊に参加しました。以前から、当協会を含め台湾関係諸団体・グループが交互に慰霊活動を行っていることを見聞きし、関心は持っていたながらもなかなかタイミングが合わなかったところ、今回なんとか参加が叶いました。

奥多摩湖畔の慰霊碑のある地点は、かなり登山歩行が必要な山奥の印象で、関東を中心に大雨の被害をもたらした台風19号による影響も懸念されましたが、幸い慰霊碑周辺や経路の被災寸断もなく、更に今回は車で慰霊碑の脇まで登坂できて、高齢者が多数を占める参加者にとっては有り難いことでした。

用意した帯を車に積み忘れていたというハプニングがあったものの、手持ちの道具や木の枝などを代用、一同手分けして慰霊碑・慰霊塔の周囲を清掃して、慰霊式が始まりました。大泉誓願寺様の読経の中、順次参拝焼香して戦没者の冥福をお祈りした後、皆で讃歌を合唱し、住職の含蓄のある講話で締めくくられました。読経と鈴(りん)の音、合唱が奥多摩の澄み切った樹間の空気に木霊して、戦没者を慰霊するだけでなく、参加者である私の心も洗われる思いでした。





慰霊祭模様

法要を司られた住職藤田宗勲様は、83歳のご高齢にもかかわらず遠路お出ましいただいた上、さらに驚いたことには全行程を自ら車を運転されたの超越しで、そのご熱意に感服いたしました。

台湾出身戦没者の慰霊碑が、なぜこのような山奥にあるのか不思議に思っておりましたが、そこからの眺めが故郷台湾の日月潭に似ていたからとのこと。そういえば奥多摩湖も日月潭と同じ人造湖で、昭和32年に完成した小河内ダムが、多摩川の源流を塞ぎ止めて生まれたものです。ちょうど戦後復興から高度経済成長へと転換していく頃の大型建設事業として世の注目を集め、小学校でもタイムリーな教材として取り上げられたことから、当時低学年だっ

た私の記憶にも深く刻まれました。

また、成長期を過ごした生家のあった杉並は、青梅街道を軸とする生活圏にあり、毎日街道を往来してその名に親しみながらも、名称の由来である青梅の地を踏んだことは、まだありませんでした。

こうしたことあって、青梅の街を経由し青梅街道を辿って多摩川の渓谷を遡り、東京深奥の水源を訪ねることは、何か自分の記憶の原点を確認するようでもあり、そこに私の父と同じ台湾出身者の碑があるというところ、ルーツを尋ねることに通ずるものがあるように感じました。

私の父郭茂林の場合は、戦前に台北から上京し、大学の研究室に在籍して兵役に就くことなく終戦を迎え、そのまま東京に残って日本の復興やそれに続く高度成長に参画することができました。自分の志を実現し家庭も築いて、天寿を全うすることができたのも、同世代の台湾出身同朋の尊い命のおかげです。今日の日本があり、私達が生きているのもその賜物と、今回の慰霊の行程を終え感謝の気持ちを新たにしました次第です。

## 慰霊祭にて

倉地 京平

最近、台湾へゆっくり旅行に行きたいと、体の様子見ながら、関心を持つ



眼下の湖風景

ていたところ、10月にオール台湾デーがあり、そこで戦没者慰霊碑やその法要のあることを知り、参加しました。快く受け入れていただき、法要も皆さんとの会話も、参加して良かったと、感謝しています。

大泉誓願寺ご住職が自ら運転される車で、奥多摩湖に向かいました。小河内神社の手前、峰谷橋を渡ったすぐを右折し馬頭館に沿って急坂を上りました。坂はさらに急になり荷上げの車の他は、杉林のハイキングを楽しみました。紅葉のはじまる心地よい登りでした。

台湾人戦没者慰霊碑は台湾から運んだ大きな石で、左には10年遅れて建てられた鎮魂碑は高砂族の蛮刀を模した

という10mもの石碑です。杉林の中、右手の急峻な斜面の下に、奥多摩湖の中の小河内神社が見下ろせます。

慰霊碑の周りを清めたあと、持参した焼香台や椅子を並べ、大泉誓願寺ご住職ご夫妻とともに法要を営みました。日本軍兵士として参戦しながら亡くなった方々を、戦後は日本ではなくなったからといっても、忘れず法要をする気持ちを大切にしたいと思えました。そして、ご住職の説教にもありましたように、それは、故人たちのためというより、法要を営む私たちのためなのだと思えました。

ご住職の運転をしながらの心配りや、スタッフの方々や参加の皆さんに親しくしていただいて一人での初参加の私は楽しく過ごした一日でした。

最近台湾と日本とについて以前より知るようになり、一般には親日台湾とはいえ、郭茂林さんの映画に垣間見るように良いことばかりをしたわけではない日本人のことも多く知るようになりました。台湾行きを実現したいと思っています。ありがとうございます。





慰霊に参加して思ったこと

藤田 明子

慰霊碑のある山道を下りながら、ふと子供のころ山ですごした日のことを思い出しました。

戦後、何もなかった時代に、あたしの家、岡本家の7人は福岡県と佐賀県との境にある脊振山の山中に住んでいました。小さな藁ぶき屋根の小屋に父母と兄弟5人の7人家族でした。山には電気も水道もなく、村の開墾地には家族のほか、にわとりとアヒルと猫と犬と山羊が同居していました。たまいに、キツネや蛇も遊びに来ていました。坂を下ったところに池があり、その池でおむつを洗ったり、ドラム缶のお風呂をわかしたり洗濯をしたり、泳いだり、魚を釣ったり水の上で寝ころんだり、それはそれは楽しい山の生活でした。

父は戦前から、台湾の高雄で布教活動をして引き揚げ後も続けていました。父が布教から戻った時は叱られてばかりでしたが、あのころ信仰深い父にしつけられたおかげで今の私があるのだらうと思えて、仏さまに感謝する心が今日もまたふつと湧き出でてまいります。

山道は辛かったけれども、それ以上に仏さまのみ教えを今日も喜ばせてもらったなあと感謝する毎日です。

この奥多摩行はゆっくりと心が安らぐ素晴らしい集いでした。感謝しています。

協会の事務所へどうぞ

どなたのおいでも歓迎します

中庭の台湾パイパイヤ、実生から育て実が付き大きくなっています。



2階の宿泊室 臨時の宿泊ができます。



地下の会議室 事務、打ち合せ、行事の準備に使います。



1階の会議室 総会、理事会、相談等に使います。



**催しのご案内**

**映画上映会**

「空を拓く」

〜建築家・郭茂林という男〜

日時 令和2年2月29日(土)

午後2時

午後6時 の2回上映

会場 練馬ココネリ3階

イベントホール

入場 無料

**ジエイコム東京で放映されました。**

10月13日のオール台湾デーの模様がジエイコム東京で放映されました。

放映は10月15日18時から、再放送3回でした。

**◆会員募集◆**

本会では会員を募集しています。  
日本と台湾の友好親善活動をします。  
無償のボランティアです。意欲と行動力があれば年齢、経歴など問いません。  
お問い合わせは事務局まで。

**●編集後記●**

○ オール台湾デーは四回目を迎え軌道に乗ってきた感じがします。

しかし反省点が多々ありました。これをくみ上げ今後を生かさなければなりません。協会は真摯に受け止め改善に努めてまいります。

○ 今回も台北駐日経済文化代表處 謝 長廷代表からお祝いの生花をいただきました。例年のご厚志に御礼申し上げます。

○ この催しに、講師、出演者をはじめ会の準備、進行、運営に協力していただいた多くの方々のご尽力に厚く御礼申し上げます。

○ 今年は台風の影響で宅急便の到着が遅れてて農産物が到着し、販売に間に合いませんでした。関係者が購入し、丹精こめて生産した金子農園にお返しが出来ました。

また、福島県小川村の道の駅は、夜来の台風のさなか現地を出発し早朝到着、正常に開店しました。このご努力に敬意を表します。

○ 台湾人戦没者慰霊祭は、大泉誓願寺住職夫妻の奉仕を拝受して、それに十人の参加者の協力で立派に行うことができました。心から御礼申し上げます。

○ 7ページの協会事務所は初めて紹介しました。家主は会員 加藤美智子理事です。建物の1階会議室、厨房、地下1階会議室などは家主のご厚意により、無料でお借りしています。すでに9年経ちました。協会の運営にどれほど役立っているか計り知れませぬ。ただ感謝あるのみです。

○ 会報18号には会員及び会員ではない都民の方から複数の寄稿が寄せられました。全部を掲載して見ていただくことにしました。会員はお名前の後に(会員)と表示し、会員以外の方は表示がありません。

(文責 田代)

○ ベーシックライフインフォメーション協会は、日本と台湾の親善友好交流を目的とした活動を行っているNPO法人です。会員の会費と拠出、有志の寄付によって運営する自立したボランティア団体です。  
○ 「基礎生活資訊協會」係本著以日本及台灣親善友好交流為目的、(不定期)舉辦活動之NPO法人協會。同時是一個各項經費支出來自於會員會費及各方捐款的獨立自主營運的志工團體。

**本協会の構成員(会員及び賛助者)**

令和元年11月30日現在

理事長	田代 實範※	錢 妙玲
理事	加藤美智子※	張本 晃次
理事	中村 和利	尹 世琇
理事	尹 世玲	仲里 健良
理事	松本里代子	畠中 治憲
理事	石倉 詩子	川添ミチ子
監事	岡村 悦子	上里 佑子
監事	児玉 治	頼 玉珍
映画製作委員	郭 純	丸田 英明
映画製作委員	鳥羽 展維	成島 一之
映画製作委員	林 銀	河合 平
江波戸つぎ	松山 達郎	濱田 陽子
豊川 玉蘭		林 政明

※の2名は兼務

特定非営利活動法人  
ベーシックライフインフォメーション協会

会報第18号

発行日 令和元年十一月三十日

発行所 東京都練馬区石神井町六一二―三

電話 〇三―三九九六―〇一七七

発行人 田代 實範